

婆やの話

エリザベス・ギaskell



あのね、みなさん、あなたたちのお母様は両親を早く亡くされた、兄弟姉妹のないお嬢様だったのですよ。たぶん、お爺様が婆やの出身地、ウエストモアランド⁽¹⁾の牧師だったことは、お聞きになったことがあるでしょうね。あれは婆やがまだ村の学校の生徒だった時のことでした。ある日、あなたたちのお婆様がいらっしやり、乳母の代わりをしてくださるような、そんな生徒さんはここにおられませんか、女の先生にお尋ねになったのです。女の先生に呼び出されて、この子は針仕事が上手な、しっかりした正直者ですよって言われたとき、婆やはそれはもう鼻高々でしたわ。しかも、この子の両親は貧乏かもしれないが、とても立派な方たちだとまでおっしゃってくださったのです。生まれて来る赤ちゃんのことや、その赤ちゃんに婆やがどんな世話をするのか、口にしただけで婆やと同じように顔を真っ赤にされるような、そんなかわいい若奥様にお仕えできれば、それこそ本望だと思いました。でも、お話のこんな部分はあまり面白くありませんよ。何が起るのだらうって、あなたたちが待ちかねていらっしやることの方が面白いので、さっそくそちらをお話することにいたしましたましよう。

ロザモンド嬢——それが赤ちゃんの名前で、あなたたちのお母様のことなのです——が、お生まれになる前に、婆やは牧師館に住み込みで雇われました。お生まれになったとき、ほとんど婆やの仕事がなかったのは確かです。奥様はお嬢様を決して自分の腕からお離しにならず、夜もずっとそばで眠らせておいでだったからです。それでも時々お嬢様を任せ

てくださいるがありました。そんなとき、婆やはそれはもう有頂天でしたわ。あんな素敵な赤ちゃんは後にも先にも見たことはありませんもの。もちろん、みなさんも素敵な赤ちゃんでしたよ。でもね、愛くるしい魅力的な花草という点では、お母様に誰もかないませんでした。お母様は生粋のレディーでいらつしやつた、あなたたちのお婆様に生き写しでしたわ。結婚前のお婆様はミス・ファーニヴァルという名前で、ノーサンバランド⁽²⁾のファーニヴァル卿の孫娘でした。兄弟姉妹もなく、あなたたちのお爺様と結婚なさるまでは、婆やの旦那様の御家族と一緒に育てられたのだそうです。お爺様はカーライル⁽³⁾の商人の息子で、一介の副牧師にすぎませんでした。でもね、それはもう実に才気ある立派な方で——家もまばらなウエストモアランド丘陵の広範囲に及ぶ教区を受け持ち、本当によく働く人だったそうです。

あなたたちのお母様、つまりロザモンド嬢が四才か五才位になられたころ、御両親が二週間のうちに——しかも立て続けに——亡くなられてしまいました。ああ！あの時の悲しさといったらありません。あれは若奥様が婆やと一緒にちよつど次の赤ちゃんの誕生を待つておられた時でしたわ。御主人様がずぶぬれになって、いつもの長い遠出から帰つて来られたのですが、その疲労のため熱病にかかつて命を落とされたのです。それからというもの、奥様は二度と顔をお上げにならず、短い余命の間に死産を迎え、我が子を胸に抱かれたまま、ため息をつきながら息を引き取つてしまわれました。死の床で奥様は婆やに、

お嬢様を決して見捨てないでとおっしゃいましたが、たとえ言われなかったとしても、婆やはこの世の果てまでお嬢様のお供をしたことでしょう。

その後どうなったかと申しますと、婆やたちのすすり泣きが十分に収まる間もなく、遺言執行人と後見人を兼ねた人たちが事後処理のためにいらつしやいました。亡き若奥様御自身の従兄いとこにあたるファーニヴァル卿と、マンチエスターの商人で御主人様の兄にあたるエスウエイト氏です。この方は後々お金持ちになりましたが、当時はそれほどもなく、成長期にある子供をたくさん抱えておられたようですわ。さてさて！ この二人でお決めたことなのか、婆やの現在の旦那様である従兄に宛てて、奥様が死の床で書かれた手紙のためであったのかは存じませんが、ともかくロザモンド嬢と婆やはノーサンバランド州にあるファーニヴァル家の屋敷へ行くことに決まったのです。

婆やの旦那様の口ぶりでは、お嬢様が旦那様の御家族と一緒に生活することは亡き奥様の願いであり、旦那様も反対する理由がないかのようでした。あんな大所帯では一人、二人増えようが減ろうが大した問題ではなかったのです。明るくて愛くるしいお嬢様がいらつしやるというのに、そんなふうにしから見られていけないのであれば、婆やとしてもいい気がするはずはありません——だって、たとえどんな大所帯であろうと、どこでも明るい太陽のような存在になれるお嬢様だったのですもの。でもね、お嬢様の小間使いとしてファーニヴァル館の旦那様の所へ行くことを聞いて、谷間の田舎に住むみんなが驚きと賞賛の眼

で見つめていたので、婆やはそれはもう得意満面でしたわ。

婆やは自分たちが旦那様と同じ所に住むことになるのだとばかり思っていたのですが、でもそれは勘違いでした。旦那様の御家族は五十年以上も前にファーニヴァル館を去っていたことが後になって分かったのです。この御家族の中で亡き若奥様は育てられたのですが、その屋敷へ行かれたことがあるという話は聞けませんでした。それはもう残念なことです。できることならロザモンド嬢には、お母様と同じ場所で青春時代を過ごしていただきかったものですからね。

旦那様の使用人に思い切っている質問して分かったことですが、屋敷はカンバーラント丘陵の麓ふもとにあつて、とても大きな邸宅だということでした。そこには旦那様の大伯母様にあたるミス・ファーニヴァルという年輩の方が、ほんの数人の召使いと住んでおられるのだそうです。でもね、それは実に健康によい屋敷で、数年の間であればロザモンド嬢もお気に召されるだろうし、お嬢様がいらつしやれば、おそらく大伯母様も楽しい気持ちになられるかもしれない、旦那様はそう思っておいででした。

これこれの日までにロザモンド嬢の所持品を準備しておくように、婆やは旦那様に命じられました。ファーニヴァル家の代々の領主様もそうだったようですが、旦那様はプライドの高い厳格な方で、必要以上はひと言も話をされませんでした。みんなの噂によれば、旦那様は婆やの若奥様を愛しておられたそうですわ。奥様の方は旦那様のお父様の反対が

目に見えていたので、旦那様のおっしゃることに耳を貸さず、エスウエイト氏と結婚なさったということですが、詳しいことはよく分かりません。いづれにせよ、旦那様は一度も身を固められなかったのです。でもね、ロザモンド嬢にはあまり好意的な心配りをお示しになりませんでしたよ。亡き奥様に心を寄せておられたのであれば、お嬢様にそんな態度はとられなかっただろうと婆やは思いました。旦那様は屋敷へ行く婆やたちに使用人をつけてくださり、その人にはその日の夕刻にニューカースル⁽⁴⁾で落ち合うようにとおっしゃいました。

そういうわけで、婆やたちを初対面の方たちに紹介してくれる時間もままならず、その人もまた早々に婆やたちと手を切って行ってしまったのです。大きな古い屋敷に二人ぼつねんと（婆やは十八にもなっていないかったのに）残されてしまいました。そこへ馬車に乗って行った日のことは昨日のことに思えます。その昔すごいなああって婆やが驚いたことのある馬車、それも旦那様の馬車に乗っての旅だったにもかかわらず、なつかしい牧師館を朝早く発つてからというもの、二人とも心臓が張り裂けんばかりに泣いていました。ところで、それは九月のある日のことで、正午もかなり過ぎておりました。婆やたちはどこもかしこも炭坑夫ばかりの小さなすすけた町で馬車を止め、その日最後の馬の交換をしました。ロザモンド嬢は眠り込んでおいたが、馬車で近づく際に屋敷と庭園がどんなものか見ておくために、起こしなさいと婆やはヘンリーさんから言われました。かわい

そうだとはいりましたが、旦那様に不服の申し立てでもされたら大変と思ひ、言われるままにいたしました。町どころか村の気配さえ感じられない所まで来て、ようやく自然のままでの大きな庭園——この南部の庭園とは違い、岩や水の流れる音、節くれだつたトゲのある樹木、すべて老齡のため白みがかつて皮のはがれたドングリの木々などがあるような庭園——の門の中に入ったのでした。

道を二マイルほど上つて行つた所に大きな堂々とした屋敷が見えましたが、その屋敷の周りをびつたり取り囲むように多くの木が立っていましたので、風が吹いた時などは壁の上を枝が引きずられるような所もありました。折れて垂れ下つた枝もありましたが、それはおそらく屋敷の管理をする人が——木の枝をおろしたり、苔むす馬車道の整備をする人が——いなかつたからでしょうね。ただ、屋敷の正面だけはきれいでしたよ。大きな楕円形をした車道には雑草が一本もなく、窓のたくさんある長い正面玄関の上には、木の枝やツタが伸びて来ないようになっていました。正面玄関の両側には翼棟が突き出ており、それぞれが東西に面する別の玄関の端の部分にあたっていました。とても荒れ果てた屋敷でしたが、予想をずっと上回るほどの大きさでしたわ。裏手には塀で仕切られないほど広くて、草木のない丘陵地がそびえていました。そして後で気づいたことですが、正面に立つて見ると分かるように、屋敷の左手には時代遅れの小さな花園がありました。その花園は西の玄関の扉を開くと見ることができ、昔のファニーヴァル卿夫人とかいう方のために、

うっそうと茂る森を少しえぐって造られたものだそうです。けれども、森の大きな樹木が生い茂って、花園は陰でおおわれてしまっており、その秋の時節に花を植えたとしても、ほとんど育ちはしなかったことでしょう。

馬車で大きな正面玄関まで来て広間に入ったとき、迷子になるのではないかと思いました——それほど大きくて果てしなく広かったのです。すべて青銅製のシャンデリアが天井の中心から吊り下げてありましたが、婆やは生まれて初めての経験にただ息を飲んで見上げるばかりでしたわ。それから、玄関の広間の片側には大きな暖炉がありました。婆やの田舎の家の側面と同じ位の大きさで、薪まきをのせる台や薪をつかむ道具もまた巨大なものでした。暖炉のそばには古めかしい重厚なソファまきがいくつかありました。その反対側、広間に入って左手には——つまり西側ですが——壁に作り付けのオルガンがあつて、これもそちら側の大部分を占めるほどの大きさでした。同じ側のオルガンの向こうには扉があり、向かい側の暖炉の左右にもそれぞれ東の玄関に通じる扉がありました。屋敷に滞在している間、婆やは一度も通つたことがないので、その先に何があるのか詳しいことは分かりません。

午後遅くなつていたので、暖炉の火がついていない玄関の広間は暗くて陰気でしたが、そこには一瞬たりとも長居はしませんでした。先ほど扉を開けてくれた年寄りの召使いがヘンリーさんにお辞儀をし、それから例のオルガンの向こう側の扉から婆やたちを中に入

れてくれ、小さい広間や廊下をいくつか通り抜けて、西の茶の間へ案内してくれました。彼が言うには、そこにミス・ファーニヴァルが座っておいでになるとのことでした。かわいそうにロザモンド嬢は、この大きな屋敷で迷子になっておびえておられるかのように、婆やにびったり寄りすがつておられました。婆やとて気分的にはお嬢様と大差なかったのですよ。西の茶の間はぼかぼかする暖炉の火と数多くのゆったりした立派な家具があった、それはもう気持ちのよい部屋でしたわ。ミス・ファーニヴァルは八十歳前後の老婦人だったような気がしますが、詳しいことは分かりません。やせた背の高い方で、顔には至るところに針の先でひっかいたような細かい皺しわがたくさんありました。ラップ型補聴器の世話にならねばならないほど耳が遠かったためでしょうか、その埋め合せに目の方は何ひとつ見逃さないような感じでしたわ。

一緒に座って大きなタペストリーを織っていたのは、小間使いで話し相手のスターク夫人で、二人の年齢はほとんど同じ位でした。彼女はミス・ファーニヴァルと幼い時からずっと一緒に生活していましたので、今では小間使いというよりは、むしろ友達のように見えました。そして、今まで誰も好きになつたり、愛したりした経験がないのでしょうか、石のように冷たく青白い顔をしていました。自分の女主人以外に人を本当に好きになつたことなどないのでしょうか。女主人の耳がとても遠かったため、スターク夫人はほとんど子供のように扱っておりました。ヘンリーさんの方は旦那様からのメッセージを伝えると、

婆やたちみんなに頭を下げながら別れを告げ——かわいいロザモンド嬢が差し出された手には目もくれず——帰って行ったので、後に残された婆やたちは、二人の御婦人から眼鏡越しに見つめられたまま、その場に立ち尽くしていました。

最初に家の中に入れてくれた老召使いがベルで呼ばれ、婆やたちを部屋へ案内するよう言われたとき、それはもうほっとしましたわ。その大きな茶の間から出て別の居間に入り、今度はそこを出て大きな階段を昇り、広い回廊を——何か書庫のような、片側にはずつと本があつて、反対側にもずつと窓や書き物机がある場所を——通つて、ついに婆やたちは自分たちの部屋に着きました。そこがちょうど台所の上だと聞いた時の嬉しさといったらありません。あんな荒野のようにただだっ広い屋敷では、たちまち迷子になってしまうと不安になり始めていたからです。この屋敷には昔から御子息や御息女のみなさんが使われた古い育児室がありまして、暖炉では火が心地よく燃え、鉄柵のやかんは沸騰していて、テーブルにはお茶の道具が並べてありました。そして、部屋の外は夜間用の育児室になつていて、婆やのベッドのそばにはロザモンド嬢の囲い付きのベッドがありましたわ。

ほどなく老ジエイムズが妻のドロシーに、婆やたちの接待をするように大声で命じました。二人とも実に親切で手厚いもてなしをしてくれたので、すぐさまロザモンド嬢と婆やとは本当にくつろいだ気分になれました。お茶が終わる頃には、お嬢様もドロシーのひざの上で、ちっちゃな舌が回るかぎりの速さでおしゃべりしておられたほどです。やがてド

ロシーがウエストモアランド出身だということが分かったため、彼女と婆やはいわば朋友の交わりを結びました。老ジエイムズと奥さんほど親切な人たちには、巡り合おうとしたって無理でしょうね。ジエイムズは生まれてこの方ほとんど婆やの旦那様の所で暮らしていましたが、これほど豪勢な家族はないと思つていたようです。結婚してからというもの、奥さんが農夫の家庭以外で暮らしたことがないという理由で、少し見下してさえいたほどです。でもね、もつともなことかもしれません、奥さんのことがそれはもう大好きだったのですよ。二人の下には辛い仕事を全部やつてくれるおさんどんがいて、アグネスと呼ばれていました。その子と婆や、ジエイムズとドロシー、それにミス・ファニーヴァルとスターク夫人によつて、この家族は構成されていたわけですが、みんな愛くるしいロザモンド嬢のことをいつだつて忘れたことはありませんわよ！

お嬢様がいらつしやる以前、他の方たちはどうしておられたのかしらつて婆やは思いました。それほどみなさん今ではお嬢様を猫かわいがりなさるのです。台所であれ茶の間であれ、お嬢様にはどうでもよいことでした。物悲しげで厳しいミス・ファニーヴァルと冷たいスターク夫人の顔は、お嬢様があつちでふざけ、こつちでたわむれ、絶え間なくつぶやいたり、嬉しそうにかわいい片言を発したりしながら、鳥のようにばたばたと部屋に入つて来られると、それはもう嬉しそうな顔になりました。お嬢様が幾度となく飛ぶように台所へ逃げて行かれると、二人とも確かに残念そうでしたわ。もつとも、二人とも実にプラ

イドが高かったので、そばにいてちようだいねってお嬢様にお願ひされることもなく、むしろお嬢様の品のなさに少しびつくりされた様子でした。とはいえ、スターク夫人がおっしゃったように、お父様がどういう家柄の出であるかを思えば、それも確かに驚くようなことではありませんでした。

ところで、四方八方に広がった大きな古い屋敷はロザモンド嬢にはもってこいの場所でしたわ。婆やを後ろに従え、屋敷中くまなく探検なさいました。一度も開けられたことなく、婆やたちが行こうとも思わなかった東の翼棟は別ですが。でもね、西側と北側には楽しくなるような部屋がたくさんあって、いろいろ経験した人たちには珍しくないかもしれませんが、婆やたちにとっては珍奇に見える品々が一杯あったのです。その窓は、大きな円を描いて張り出した樹木の枝や、一面にはびこったツタのせいで暗くなっていました。そうした植物のせいで薄暗くなつてはいましたが、古びた中国の壺つぼや彫刻を施した象牙の箱、重々しい大きな本、そして中でも古い肖像画をなんとか見ることができました。

よく覚えていますが、お嬢様がどうしても一緒にドロシーを連れて行くとおっしゃったことがあります。誰の肖像画であるか、ひとつ残らず名前を言わせようとなさったのです。すべて婆やの旦那様の一族の肖像画でしたが、ドロシーは全部の名前を言うことができませんでした。玄関の広間の上にある古い儀式用の客間にやって来たとき、婆やたちはすでに大半の部屋を通り抜けておりました。その客間にはミス・ファーニヴァルの、すな

わち妹だったので当時の呼び名ではミス・グレイス⁽⁵⁾ですが、その肖像画がありました。それはもう美人だったに違いありません！でもね、そのすわった目つきは実に誇り高く、美しい目からは軽蔑が顔をのぞかせ、吊り上がった眉は私を見つめるとは無礼にもほどがあると言わんばかりで、そこに立って眺める婆やたちに対して唇をゆがめているようでしたわ。ドレスを着ておられましたか、あんなドレスは今まで見たこともありません。さぞかし若い頃には流行していたのでしょうか。帽子は何かビーバーの毛皮のように柔らかく白い素材のもので、少し目深^{まが}にかぶっておられ、美しい羽飾りが片方にぐるりと広がっていました。そして、青いサテンの化粧着の前側には、キルト風の白い胸飾り^{スタマツカー}⁽⁶⁾が見えておりました。

「これは驚きです！」婆やは眺めるだけ眺めて、そう申しました。「人は草なり、⁽⁷⁾人間のはかなさを示すとよく言いますが、ミス・ファーニヴァルが昔はこんな素晴らしい美人だったなんて、今の姿を見て誰が思うでしょうか？」

「そうですね」とドロシーが言いました。「痛ましいことに人間は変わり果てるものですわ。でも、先代の御主人様がおっしゃったことが本当なら、お姉様のミス・ファーニヴァルの方がミス・グレイスより美人だったそうですよ。その方の肖像画もどこかの辺にあるでしょう。お見せしてもいいですが、見たなんてジェイムズにおっしゃっては困りますよ。お嬢様の方は口をつぐんで黙っておられるでしょうか？」と彼女は尋ねました。

かわいいお嬢様は隠し立てなどなさない大胆な方でしたので、自信はありませんでした。それで、婆やお嬢様に隠れん坊をさせておいてから、表面を壁に向けて立てかけてある大きな肖像画をドロシーと一緒に裏返しました。他の肖像画のように壁にかけられていかなかったのです。確かに美しさの点ではミス・グレイスにはかないませんでした。人を蔑むさげすようなプライドの高さという点でもそうだと思いますが、その点ではひよつとするといひ勝負だったかもしれないですね。婆やとしては一時間でも見ておれたのですが、ドロシーの方は絵を見せたことが少し怖くなったようで、急いで絵をもとに戻してから、婆やに走ってロザモンド嬢を見つけに行ってくださいと言いました。できれば子供に行かせたくないような物騒な場所が屋敷にはあったからです。婆やは勇敢な気概のある女の子でしたので、ドロシーの言ったことなんか屁へとも思いませんでした。教区のどんな子供にも負けず隠れん坊が大好きだったので。そういうわけで、走ってお嬢様を捜しに行きました。

冬が近づき日も短くなるにつれ、誰かが玄関の広間の大きなオルガンを弾いているような、本当にそんな音が聞こえる時がありました。毎晩その音が聞こえたわけではありませんが、確かにしよっちゅう聞こえたのです。たいていは、ロザモンド嬢をベッドに寝かせてから、そばに腰を下ろして寝室で静かにじっとしている時でした。すると、その音は遠くの方で鳴り響きながら、どんどん大きくなったものです。最初の晩、夕食に降りて行っ

たとき、誰が演奏しているのかってドロシーに尋ねてみました。ところが、ジェイムズがけんもほろろに、木立の間で風がヒューヒュー鳴っているだけなのにオルガンの音だと思ふなんて、あんたは馬鹿だって言うのです。でもね、ドロシーは非常におびえたように彼の方を見ていましたし、おさんどのアグネスは声をひそめて何かつぶやくと顔面蒼白になったのですよ。みんな婆やが質問するのをいやがっていたようなので、ドロシーと二人だけになるまで押し黙っていました。彼女なら多くのことを聞き出せると思つたからです。

それで翌日、機会をうかがって彼女をなだめすかし、オルガンを演奏しているのは誰かって尋ねてみました。ジェイムズの前では黙り込んでいたものの、あれは風ではなくオルガンの音だって、婆やにはちゃんと分かっていたのです。でもね、どうやらドロシーは彼から大目玉を食つたようで、ついにひと言も聞き出せませんでした。それならば今度はベツシーの番です。婆やはジェイムズやドロシーと同等に扱われていましたし、ベツシーは二人の召使いも同然でしたので、婆やも彼女に対してはいつも偉そうに構えていました。ベツシーは「決して、決して他言なさないでくださいね、口が滑つてもわたしが口外したなんて、絶対おっしゃらないでくださいね」って言いました。あれはとても不思議な音で、彼女は何度も聞いたことがあるそうでした。たいていは冬の夜、それも嵐の前で、みんなが言うには、あれは大旦那様が生前よくしておられたように、玄関の広間の大きなオルガンを演奏なさっている音だということでした。でもね、大旦那様とは誰のことなのか、どう

して演奏なさるのか、そして特になぜ冬の嵐の晩に決まって演奏されるのか、彼女には言えませんでしたし、婆やに教えるつもりもないようでした。

さてさて！ さつき婆やは勇気があるって申しましたわね。ですから、たとえ演奏者が誰であろうと、こんな荘重な音を家中とどろき渡らせておくのも一興だと思つたわけです。だって、その音は大きな突風より高い音になって、いかにも生き物のようにむせびながら勝ち誇つたかと思うと、次の瞬間には静かになって、この上なく低い音になるのですからね。ただ、それはいつも音楽の調べ、はつきりとした旋律であつて、風の音だなんて言うのは、それこそ馬鹿げたことでしたわ。最初は、演奏なさっているのはミス・ファーニヴァルかもしれない、ベッシーが知らないだけなのだと思つていました。でもね、ある日のこと、婆や以外には誰もいなかったたので、以前クロスウェイト⁽⁸⁾の教会のオルガンを開いてあちこちのぞいてみたように、このオルガンに対しても同じことをしてみました。見かけはとても素晴らしかったものの、内側はすっかり壊れていましたわ。そういうわけで、昼間だったにもかかわらず、少し身の毛がよだち始め、婆やはオルガンを閉めるや一目散に明るいうちへ逃げ帰つたのです。それ以来しばらく、ジェイムズやドロシー同様にオルガンの音を聞くのがいやになりました。

ところで、その間もずっとロザモンド嬢は日増しにかわいがられるようになりました。老婦人たちは早めの夕食をお嬢様と一緒になさりたがり、そんな時はミス・ファーニヴァ

ルの椅子の後ろにジェイムズが、ロザモンド嬢の後ろには婆やが威儀を正して立っておりました。夕食後に、ミス・ファーニヴァルがうとうとされ、婆やが台所で食事をしている間、お嬢様は大きな茶の間の片隅でネズミのように物静かに遊び回っておいででした。でも後から、お嬢様はすごく楽しそうに婆やのいる育児室へいらっしやいました。というのも、お嬢様の話によりますと、ミス・ファーニヴァルはひどく悲しげな、スターク夫人はひどく退屈な方だったからです。それに対してお嬢様と婆やは明るくて快活でした。それで、この不気味にとどろく音楽も婆やはほどなく気にならなくなりました。音の出所が判然としないのであれば、それは杞憂きゆうにすぎないのですから。

その年の冬はそれはもう寒かったものです。十月なかばに霜が降り始め、何週間も続きました。よく覚えていますが、あれはある日の夕食時のことでした。ミス・ファーニヴァルが悲しげな憂いに沈んだ目をお上げになり、スターク夫人に「恐ろしい冬になりそうだがね」と妙に意味ありげにおっしゃったのです。けれども、スターク夫人は聞こえないふりをして、他のことを大声で話しておいででした。お嬢様と婆やは霜なんか何のそのでしたわ。まさか婆やたちがねえ！ 晴れているかぎり、屋敷の裏手にある険しい坂道を登って、荒涼とした草木のない丘陵地へ行き、深々と身を刺すように冷たい新鮮な大気の中でかけっこをしたものです。婆やたちは前に通ったことのない道を下りて来たことが一度ありました。その時は節くれだった二本の古いヒイラギの木の前に出てしまいました。そ

の木は坂道の中程から屋敷の東側の方へ伸びていました。ところで、日がだんだん短くなるにつれ、大旦那様が演奏される——あれが大旦那様だとしたらの話ですが——例の大きなオルガンの音が、ますます嵐のように激しく物悲しげになつて来ました。

ある日曜の午後のことでしたが——十一月も終わり頃だったはずですが——ミス・ファアニヴァルがうたたねをなさったあと、お嬢様が茶の間から出ていらつしやったら世話をしなさしあげるよう、ドロシーに頼んだことがあります。一緒に教会へお連れするには寒すぎたのですが、婆やだけでも行きたかったものですからね。ドロシーは喜んで引き受けてくれ、お嬢様のことが大好きだったので、何も問題はないように思えました。そういうわけで、まだ十分に夜が明けていないかのように、暗い空が純白の大地の上にどんよりと垂れ込めていましたが、ベッシーと婆やは足早に出かけたのです。風こそなかったものの、大気の冷たさは身を切るようで、それはもう厳しいものでしたわ。

「雪が降りそうですね」とベッシーが言いました。案の定、教会にいる間に大きな綿雪が舞い始め、あまりに降りしきるので窓がほとんど暗くならんばかりでした。外に出ると雪はやんでいましたが、足の下にはたくさんの柔らかい雪が深く積もっていて、婆やたちはザクザクと踏みながら家に帰りました。玄関の広間に着く頃には月が出ていて、二時から三時の間に教会へ出かけた時よりは——月の光やら目もくらむほどの純白の雪やらで——その時の方が明るかったほどです。まだ話していませんでしたが、ミス・ファアニヴァル

とスターク夫人が教会へ行かれることは決してなく、陰鬱にも二人だけでひっそりと祈とう書を読んでおいででした。タペストリー作りに精を出すこともできない日曜日⁽⁹⁾は、二人にはとても長く感じられたようです。ですから、ロザモンド嬢を連れて二階へ上がるために台所のドロシーの所へ行つたとき、婆やは彼女の口から御婦人たちがお嬢様を引き留めていらつしやるようだ、お嬢様もまた婆やの言い付けを守って、茶の間で愛敬を振りまくのになんざりしたからといって、台所の方へは決していらつしやらないと聞かされても、それほど驚きはしませんでした。

というわけで、婆やは外套を脱いでから、お嬢様に育児室で夕食をとっていたかどうかと、思つて捜しに行つたのです。でもね、例の一番よい茶の間へ行つても、そこには二人の老婦人がひっそりと座つておられるだけで、時折ことばを漏らされることはあつても、ロザモンド嬢のような明るく陽気な人はついぞ近くに來はしなかつた、とでも言うような顔をしておいででしたわ。それでもなお、婆やに見つかからないように隠れていらつしやるのかもしれない、かわいいお嬢様のいつものことですから、何も知らない顔をするように二人を言い含められたのだと思ひました。それで、あちこちソファの下や椅子の後ろをそつとのぞきながら、お嬢様の姿が見えないということでは非常におびえたふりをしてみたりしました。

「へスタ、どうしたんだい？」と、木で鼻をくくつたようにスターク夫人がおつしやい

ました。ミス・ファアーニヴァルが婆やの方を御覧になったかどうかは分かりません。さつき申しましたように、耳が非常に遠く、その時も希望を失ったような顔をなさつて、ぼんやりと暖炉の火を見つめながら、じつと座つておられたのですからね。婆やは「お嬢様を捜しているだけです」と答えましたが、お嬢様の姿は見えずとも、この近くにいらつしやるはずだつて、まだ考えていました。

「ロザモンド嬢はここにいらつしやいませんよ」とスターク夫人がおつしやいました。「二時間以上も前にドロシーを捜しに行かれましたから」

そして、夫人もまた暖炉の方を向き、そのままずっと火を見つめておられました。

これを聞いて落胆した婆やは、お嬢様から離れなければよかつたと思い始め、それでドロシーの所へ戻つてから事の次第を話しました。その日はジェイムズが外出中だったので、彼女と婆やとベッシーは明かりを手にとつて、まず二階の育児室へ行き、それから大きな屋敷を歩き回りながら大声でロザモンド嬢に呼びかけ、隠れているなら出ていらつしやるように、こんなことで婆やたちを怖がらせたりなさらないように懇願したというわけです。でも返事が全然なく、物音さえ聞こえませんでした。

「ああ！」ついに婆やは言いました。「まさか東の翼棟に入って、あそこに隠れていらつしやるのでは？」

ところが、そんなことは考えられないとドロシーが言いました。彼女自身そこに入った

ことがなく、扉はいつも閉められていて、旦那様の執事が鍵を持っていて、とにかく彼女もジェイムズもその鍵を見たことがないということでした。というわけで、やっぱお嬢様は老婦人たちに分からないように茶の間に隠れていらつしやるのしか思えないので、もう一度あそこへ戻って確かめて来ようと婆やは申し出ました。そこで見つければ、こんな怖がらせたことに対して、鞭むちでうんとお仕置をしてやりましょうって、そう婆やは言ったのですが、無論そんなつもりはありませんでした。それで、西の茶の間へ引き返し、お嬢様の姿はどこにも見あたりませんとスターク夫人に伝えてから、家具の周囲をくまなく捜す許可を求めたのです。どこかばかばかする人目につかない片隅で眠ってしまわれたのかもしれないと思ったのですが、やっぱり駄目でした！ 婆やたちはみんなで捜しました。ミス・ファーンニヴァルも立ち上がって全身を震わせながらお捜しになりましたが、お嬢様は部屋のどこにもいらつしやいませんでした。

それから、婆やたち屋敷中のすべての者は、もう一度初めから先ほど捜した場所を全部のぞいてみましたが、お嬢様を見つけたことは結局できませんでしたわ。ぶるぶるとミス・ファーンニヴァルがあまりに身震いなさるので、スターク夫人が暖かい茶の間へ連れて戻られました。その前に婆やは、お嬢様が見つかり次第、すぐ二人の所へお連れすると約束させられました。ああ！ もう見つからないのではと思ひ始めた矢先、婆やはすっかり雪でおおわれた正面の大きな中庭を窓から見てみようと思ひました。外を見た時は二階にいた

のですが、月の光がとても明るかったので、そこからでも二つの小さな足跡がはつきり見えしました。足跡をたどると、玄関の広間の扉から東の翼棟の角を曲がって行ったように見えました。どうやって下へ降りて行ったか覚えていませんが、婆やは広間の大きな硬い扉をぐいっと引つ張って開け、それから外套の代わりに化粧着の裾すそを頭にかぶって、外へと走り出たのです。東の角を曲がると、雪の上に黒い影が射していましたが、そこから再び月の光の下に出ると、例の小さな足跡が上の方へと向かっています——丘陵地の方です。外は身にこたえるような寒さでした。走る時に顔の皮膚ひわがはがれるのではないかって思えるほど、それほど冷たかったのです。でもね、走り続けながら、お嬢様がかわいそうに弱り切っておびえていらつしやるに違いないと考えると、婆やは涙がでてきました。

例のヒイラギの木が見える所まで来たとき、丘を降りて来た羊飼いが肩掛モイドけ⁽¹⁰⁾に何かを包んで両腕に抱えているのに気づきました。その人は大声で婆やに、子供からはぐれはしなかつたかねって尋ねてくれたのですが、婆やが泣いて声が出なかつたので、自分の方から近づいて来てくれました。そこで婆やが目にしたものは、まるで死んだかのように、その人の腕の中で身動きせず、硬直した真つ青な顔をなさつたお嬢様でした。その人の話では、夜になって寒さが厳しくなる前に羊たちを集めようと丘陵地へ登って行くと、ヒイラギの木の下で（周囲何マイルも茂みひとつない丘の斜面では、このヒイラギが唯一の黒い目印なのですが）硬直して冷たくなり、眠ればたちまち凍ってしまうような恐ろしい状態

にあつた——婆やにとつては女王様——無邪気な子——最愛の子であるお嬢様を見つけたのだそうです。ああ！ また婆やの腕に抱けるなんて、それはもう嬉しくて涙があふれ出したものです！ もはやその人に運ばせるようなことはせず、婆やはお嬢様をモードもろとも自分の腕に引き取りました。暖かい首と胸にしかと抱き寄せると、やがて再び生命の息吹がお嬢様の柔らかかな手足にゆっくりとよみがえって来るのを感じることができました。でもね、玄関の広間に着いても、お嬢様の意識がまだ戻っていませんでしたので、一息入れて話をする時間ありませんでした。それで、婆やたちは台所の扉から中に入ったのです。

「ベッド暖め器⁽¹¹⁾を持つて来てちょうだい」と言つて、婆やはお嬢様を二階へお運びし、ベッシーが燃やし続けてくれた育児室の暖炉のそばで服を脱がせ始めました。思い付くかぎりのかわいい名前やおどけた名前で呼びかけると——涙で目が見えなくなりながらも呼びかけると——とうとう、ああ！ ついにお嬢様は大きな青い目⁽¹²⁾を開かれたのです。早々に暖かいベッドへ移し、ミス・ファーニヴアルの所へ万事問題なしと伝えにドロシーをやりました。婆やは一晩中お嬢様のベッドの脇に座つていようと心に決めていました。お嬢様はかわいい頭が枕に触れるや、たちまち静かな眠りに陥つてしまわれたので、そばで翌朝まで寝ずの看病をしてあげました。夜が明けると、お嬢様はぱっちりした澄んだ目を開けられ、それはもう快晴の日の朝の太陽のようでした——本当に最初そう思ったのです——そして、みなさん、婆やは今でもそう思っているのですよ。

お嬢様は、老婦人たちがうつらうつらされて茶の間が退屈きわまりなかったので、ドロシーの所へ行きたいと思われたそうです。西側の玄関の広間を通りかかったとき、雪が——ふわふわと絶え間なく——降っているのが高い窓から見えたので、地面に積もった純白の美しい雪を見たいと思われたようで、大広間の方へ進んで行き、それから窓辺に近寄ると、馬車道の上に光かがやく柔らかい雪が見えたのだそうです。ところが、そこに立っておられると、お嬢様ほどは大きくない、お嬢様がおっしゃるには「すつごくかわいい」女の子の姿が見えたということです。「その子が外に出ていらつしやいと手招きしたの。それでねえ、すつごくかわいいチャーミングな子だったんで、行くしかなかったのよ」ですって。それから、その子はお嬢様の手を握って、一緒に並んで東側の角を曲がって行ったのだそうです。

「まあ、作り話をなさるなんて、いけない子ですわね」と婆やは言いました。「天国にいらつしやるお母様は生前、作り話など決してなさいませんでしたよ。お嬢様が作り話をなさるのをお聞きになったら——おそらくちゃんと聞こえていますよ——何ておっしゃるでしょうかね！」

「本当よ、ヘスタ」お嬢様はすすり泣きながら言われました。「本当のことを言ってるのよ。うそじゃないわ」

「まさか！」婆やは非常に厳しい口調になりました。「雪の中、お嬢様の足跡をたどって

行ったのですよ。お嬢様の足跡しか見えませんでしたわ。本当に女の子と一緒に手をつないで丘を登って行ったのであれば、その子の足跡も一緒についていたはずだってお思いになりませんか？」

「仕方ないわよ、へスタ」お嬢様は泣きながらおっしゃいました。「ついていかなかったとしても。その子の足を見ていたわけじゃないんだから。でもね、小さな手でわたしの手をしっかりと握っていたんだし、手はすごく、すっごく冷たかったのよ。その子に連れられて丘陵地への道を登って、ヒイラギの木の所まで行ったんだけど、そこで女の子が涙を流して泣いていたわ。でもね、わたしの姿を見ると、涙を抑えながら、すっごく誇らしげで偉そうな笑顔を見せ、わたしをひざの上のせてから、あやして寝かせつけようとしたの。へスタ、それだけよ——でも本当なの。お母様も御存じだわ」むせび泣きながらお嬢様はそうおっしゃいました。というわけで、熱に浮かされておられるのだと思い、お嬢様が繰り返される話を信じるふりをしました——何度繰り返されても常に同じ話でした。やっとのことでドロシーが扉をノックしてロザモンド嬢の朝食を持って来ました。老婦人たちは下の食堂におられ、婆やにちよつと話があるそうだと教えてくれました。前の晩に二人そろって夜間用の育児室にいらっしゃったのですが、ロザモンド嬢がお休みになった後だったので、顔を御覧になっただけで——婆やには何の質問もされなかったのです。

「叱られるわ」北側の回廊を歩きながら密かにそう思いました。「でも」婆やは勇気を出

して考えたのです。「あの方たちに預けて行ったわけだから、お嬢様がこっそり姿を見られずに脱け出されたとしても、悪いのはあの方たちなのだ」

それで、婆やは大胆不敵に乗り込んで、事の始終をお話しました。ミス・ファーニヴァルの耳もとで叫ぶように残らず話したわけですが、甘言を用いてお嬢様を外へ誘い出し、ヒイラギの木のそばにいた偉そうな美しい女の人の所へおびき寄せた、例の雪の中にいたという女の子に話が及ぶと、あの方は両腕を――老齢でしおれた両腕を――振り上げ、大声でこう叫ばれたのでした。「ああ！ 神様、お赦しを！ お慈悲を！」

スターク夫人が抱き押さえようとなさいました。それもかなり乱暴にでした。ところが、ミス・ファーニヴァルは押えを振りほどき、いわば狂ったように警告的そして命令的な口調で婆やに言われました。

「ヘスタ！ その女の子に近づけてはいけません！ あの子をたぶらかして殺してしまおうわ！ 性悪な子なのよ！ 危害を加える、いけない子だって教えてあげなさい」

そのとき、婆やはスターク夫人にあわてて部屋から追い出されてしまいました。実は外に出られてほっとしたのですが、ミス・ファーニヴァルの悲鳴はなおも続いています。

「ああ！ お慈悲を！ 決してお赦しにならないのですか！ ずいぶん昔のこと――」

そんなことがあって婆やの心は不安で一杯でした。昼も夜もお嬢様のそばから離れないようにしました。また何か幻の後を追って、こっそり脱け出されると大変だったからです。

周囲の人たちの不可解な態度から考えて、ミス・ファーニヴァルは気が狂っておられるのではないかと思えたので、なおさら不安になりました。何か同じような運命が——この一族に固有のものかもしれないが——お嬢様に降りかかるのではないかって恐れていたのです。こうした間もずっと凍てつく寒さがゆるむことはありませんでした。いつもに増して嵐の激しい晩になると、突風の合間に風の音を通して、大旦那様が演奏される例の大きなオルガンの音が必ず聞こえたものです。でもね、それが大旦那様であろうとなかろうと、婆やはロザモンド嬢の行かれる所へは必ずお供いたしました。寄るべない孤児であるかわいなお嬢様に対する愛が、大きな恐ろしい音に対する不安にまさっていたからですよ。おまけに、お嬢様を年齢にふさわしく絶えず明るく朗らかにできるかどうかは、婆や次第だったのですからね。

婆やたちは一緒に遊び、あちこちどこへ行くにも一緒に歩き回りました。というのも、あんな四方八方に広がった大きな屋敷では、お嬢様をまた見失ってしまうのではないかって恐れていたからです。もうすぐクリスマスというある日の午後のこと、たまたま婆やたちは大広間のピリヤード台で一緒に遊んでおりました。といつても、正しい遊び方を知っていたというわけではなく、お嬢様がかわいい手でなめらかな象牙の玉をころがしたいとおっしゃったので、婆やも同じことがしたいと思ったからにすぎません。戸外はまだ明るかったものの、婆やたちが気づかないうちに、室内は薄暗くなっていました。お嬢様を連

れて育児室へ戻ろうかと考えていたとき、お嬢様が藪から棒に大声で叫ばれました。

「見て、へスタ！ 見てちょうだい！ 雪の中にいた例の女の子がいるわ！」

婆やが長細い窓の方を向きますと、そこには確かにロザモンド嬢より小さな女の子の姿が見えました——あんな寒さの厳しい夜に、戸外にいるには全くふさわしくない服装でしたが——まるで家の中に入れてもらいたいかのように、泣きながら窓ガラスをたたいていました。その子がすすり泣いて涙にむせんでいるように見えたので、とうとうロザモンド嬢は我慢できなくなり、急いで扉を開けに行かれました。ちょうどそのとき、突如として婆やたちの近くに雷でも落ちたかのように、例の大きなオルガンがどろき渡ったので、それはもう怖くて震え上がりましたわ。この幽霊のような子供が力一杯ちっちゃな手で窓ガラスをたたいているのに、寒さがひしひしと身にしみる静寂の中でさえ、その音が全く聞こえないのです。そのことを思うと、震えがますますひどくなりました。泣き叫んでいる姿ははつきり見えたのですが、ほんのかすかな音すら婆やの耳には聞こえないのです。この時のことを完全に覚えているかと言われると自信はありません。オルガンの大響音が耳を聳さんばかりで、婆やはおじけづいてしまっていたからです。でもね、これだけはちゃんと覚えていますよ。玄関の広間の扉が開けられる前に、婆やはロザモンド嬢を捕まえて、しっかりと抱いたまま——足をバタバタさせ、ギャーギャー泣いておいででしたが——ドロシーとアグネスがせつせとミンスパイ⁽¹³⁾を作っていた明るい大きな台所へ運んで行っ

たのです。

「お嬢様がどうかありませんか？」胸も張り裂けんばかりにしゃくり上げておられたロザモンド嬢を運び込むや、ドロシーが大声でそう言いました。

「扉を開けて、あの子を中に入れてあげたいのに、婆やがそうさせてくれないの。夜通し荒野なんかいたら、それこそ死んじゃうわ。ヘスタは残酷で意地悪よ」と言つて、お嬢様は婆やの顔をピシヤリと打たれました。もつと激しく打とうと思えば打てたかもしれませんが。ドロシーの顔には身の毛のよだつほど怖い表情が浮かんでいて、それを見てぞつとした婆やは、血も凍らんばかりに、じつととして動かなかつたのですからね。

「裏の台所の扉をしつかり締めて、かんぬきで固く閉じてちょうだい」とドロシーがアグネスに言いました。それ以上彼女は何も言わず、ロザモンド嬢をなだめるため、婆やにレーズンとアーモンドをくれました。ところが、お嬢様は雪の中にいる女の子のことで泣きじゃくるばかりで、おいしいものには少しも手をつけられません。ですから、お嬢様がベッドで泣き寝入りなさったとき、婆やは思わず感謝しました。そのあと、婆やはそつと台所へ降りて行き、覚悟を決めたということをドロシーに伝えました。お嬢様をアップルスウエイト⁽¹⁴⁾にある婆やの実家へ連れて帰るつもりだったのです。そこなら質素な生活でも安心ですからね。大旦那様が演奏なさるオルガンにはずいぶん怖い思いをさせられましたし、それに付近の子供にしては立派すぎる身なりをした例の悲しげな子供が——右肩に

は黒い傷跡がありました。家の中に入ろうと窓をドンドンたたいているのに、物音ひとつしないのを婆やが自分の目で見たのですからね。ロザモンド嬢もまた、あれが自分を誘い出して危うく凍死させかけた幽霊と同じ子供だっておっしゃいましたので（ドロシーも同じように思っていましたし）、婆やはこれ以上もう辛抱するつもりはありませんという決意を伝えたのです。

一度か二度、ドロシーの顔色が変わるのに気づきましたが、婆やの話が終わると、彼女はロザモンド嬢を連れて行くことはできませんよって言いました。お嬢様の後見人は婆やの旦那様であるから、婆やには何の権利もないって言うのです。ほとんど実害はないのだし、みんなもまた慣れて我慢するしかないのに、耳や目に入って来る単にそういったもののためだけに、大好きなお嬢様を置き去りにするのですかって、ドロシーは婆やに尋ねました。それはもう体がぶるぶる震えるほど、はらわたが煮えくり返ったので、あなたはそんなことが言えていいわね、こういうふうには耳や目に入って来るものが何を意味するのか知っているわけだし、多分あの幽霊のような子供が生きていた頃も何か関係があったのでしょうかからねって、婆やはそう言ってやりましたよ。そして、ドロシーを散々なじったので、とうとう彼女は知っていることを残らず話してくれました。あとで婆やは聞かなければよかったと思いましたわ。聞く前よりもずっと恐ろしくなっただけでしたからね。彼女が言うには、この話は彼女が結婚したところ、ここの田舎の人たちが時たま屋敷の大広

聞へやって来ていた——こんな悪評が立つ以前のことですが——その頃まだ生きていた近所の老人たちから聞いた話だそうです。もともと、彼女が聞いたという話は真実かもしれませんが、そうでないかもしれませんね。

大旦那様というのは実はミス・ファニーヴァルのお父様でした。ドロシーはミス・グレイスと呼んでいましたが、それは長女であるミス・モードの方が正しくはミス・ファニーヴァルだったからです。大旦那様は慢心しきった方でした。世にもまれなほどプライドの高い人で、その点では二人のお嬢様も同じでした。婆やが儀式用の客間にかかっている肖像画で気づいたように、お嬢様たちは当時でも類まれな美女でしたので、殿方は選り取り見取りでしたが、誰ひとりとして結婚してくださる方はおられませんでした。でもね、古い言伝えにありますように、「おごれる者は久しからず」⁽¹⁵⁾でした。この傲慢な美しい二人のお嬢様は同じ男に恋をなされたのです。それは外国の一介の楽師にすぎず、二人のお父様が屋敷で一緒に音楽を演奏するのに南のロンドンから連れて来られた男でした。それというのも、大旦那様にとっては何よりも——とはいってもプライドの次ですが——音楽が大切だったのです。大旦那様は名前を聞いたことのある楽器はほとんど何でも弾くことがおできになりました。にもかかわらず、お気持ちの和らぐことがなかったのは不思議なことですね。それはもう厳格で頑固な方で、その情け容赦もない態度に、かわいそうな奥様は心を引き裂かれるほどだったということです。音楽には目がなく惜しげもなく金を使わ

れたそうで、この外国人をお呼びになったのも、そのためだったのでしょね。

男が奏でる調べはとても美しく、木にとまった小鳥たちでさえ、さえずりを忘れて聞きほれたといひます。この外国の側近は次第に大旦那様の心を捕らえて放さなくなつたため、大旦那様は毎年呼び寄せずには満足できなくなつたのでした。あの大きなオルガンをオランダから持つて来させ、玄関の広間の今ある場所に据え付けさせたのも、この楽師でした。オルガンの弾き方を教えるのが仕事だつたわけですが、ファーニヴァル卿が素晴らしいオルガンと演奏の上達のことばかり考えておられるのをいいことに、再三再四この腹黒い外国人は若い二人のお嬢様の片方だけと——ある時はミス・モードと、ある時はミス・グレイスと——二人だけで森へ出歩いていたといひます。

ミス・モードが戦いに勝ち、大した代物じゃありませんが、この男を戦利品として獲得されました。二人は誰ひとり知られることなく夫婦の契りを結んだといひわけです。次年この男がやって来る前に、ミス・モードは丘陵地にある農家で女の子を出産なさいました。ミス・モードはドンカスター⁽¹⁶⁾の競馬に行かれたのだとばかり、お父様とミス・グレイスは思つておられたようです。ところが、妻となり母となつても、気性は少しも和らぐことなく、傲慢ですぐかつとなられる点も昔のままでした。いや、おそらく、もつとひどくなつたかもしれませんね。というのも、この夫である外国人が、俺はおまえの妹にしつこく言い寄つてやつたぞ——おまえの目をかすめてな——そういうふうに分の妻に対し

と言ったので、ミス・モードはミス・グレイスに嫉妬なさるようになったからです。

結局、ミス・グレイスがミス・モードに逆転勝ちを収められたわけで、そのため夫と妹に対するミス・モードのふるまいはますます粗暴になりました。夫の方は——いやなことは外国に雲隠れすれば簡単に遠ざけることができましたので——もう戻って来ないぞってなかば脅すように言い捨てて、その年の夏はいつもより一ヶ月も早く帰ってしまったのです。一方、女の赤ちゃんも農家に預けられたままでしたので、母親の方が少なくとも週に一度は我が子に会うため、自分の馬に鞍をつけさせ、全速力で荒々しく丘を越えて行かれたものでした。憎む場合は憎み、愛する場合は愛するという極端な方だったわけですね。その間も大旦那様は演奏を、つまりオルガンの演奏を続けておいででした。妙な調べを奏でることで恐ろしい気性も和らいだと召使いたちは思っていたようでした。その気性については、(ドロシーの話では)恐ろしいエピソードがあるということでした。大旦那様は気性だけでなく足腰も弱くなられ、歩くのに松葉杖が必要になられたそうです。御長男は——すなわち現在のファーンニヴァル卿のお父様ですが——軍隊についてアメリカに行っておられ、もう一人の御令息も航海中でした。⁽¹⁷⁾だから、ミス・モードは勝手気ままにふるまうことができたわけです。そのためか、ミス・グレイスとは日増しに冷たく苦々しい関係になり、しまいに大旦那様がいらっしやる時を除いて、二人ともほとんど口をきかれなくなりました。

外国の楽師は翌年の夏またやって来ましたが、それが最後となったようです。かんしゃく持ちで嫉妬深い二人と一緒に生活するのが疎ましくなって姿をくらまし、そして何の音沙汰もなくなってしまうのです。お父様が亡くなられたならば、結婚していたことを公表しようとも思っておいででしたのに、今や夫に見捨てられた妻としてミス・モードは——結婚されていたことなど誰ひとり知る者がいなかったの——気も狂わんばかりに子供を愛しておられたにもかかわらず、認知する勇気がなくなってしまうわけでした。だつて、お父様には恐怖を、ミス・グレイスには憎しみを抱いての生活でしたからね。次の年、夏が終わっても卑劣な外国人が戻って来なかつたので、ミス・モードとミス・グレイスは物悲しげな面持ちになり、ふさぎ込んでしまわれました。相も変わらぬ美貌ではありましたが、やつれた顔になられたそうです。ところが、ほどなくミス・モードの方は明るい顔になられたといえます。お父様の足腰がますます弱まり、これまで以上に音楽に心を奪われてしまわれ、そしてミス・グレイスとは別々の部屋になって、ほとんど全く離ればなれの生活になられたからです。ミス・グレイスが西側で、お姉様が東側の部屋——今は開かずの間となった例の部屋ですよ。これでミス・モードは愛娘と一緒にされるかもしれないと思われたようです。娘のことを知っている者は、とても口外する度胸などない、つまりミス・モードが言われるままに、偶然お目になつた小作人の子供なのだと思ひ込まねばならない人ただけで、あとは誰にも知られる必要がなかつたわけですからね。

ドロシーの話によると、こういったことはほとんど知れ渡っているということでした。とはいえ、その後に起こったことについては、ミス・グレイスとスターク夫人を除いて誰も知らないのだそうです。その当ても、スターク夫人は小間使いの身分でありながら、お姉様よりもずっとミス・グレイスと仲がよかつたといひます。でもね、召使いたちは聞くとはなしに聞いた言葉から、最後に勝ちを制したのはミス・グレイスではなくミス・モードだと思つたようです。というのは、お姉様がミス・グレイスに向かつて、あの外国の卑劣漢はずっとあんたを愛するふりをしていただけで、実はあざ笑つていたのよ——だつて、わたしの夫だつたのですもの、そういうふうに言われたのですからね。その日以来、ミス・グレイスの頬ほおと唇からは永久に血の気が引いてしまつたそうです。遅かれ早かれ必ず仕返しをしてやるつて何度も復讐を誓われ、それからというものスターク夫人がいつも東の部屋を見張つていたということです。

新年を迎えたばかりの恐ろしい夜のことでした。ずつしりと深く積もつてもなお、雪がしきりに——戸外に出ようものなら即座に視界を遮かざられるほど——雪がひひと降つてゐる時でしたが、興奮したような大きい騒音が聞こえたといひます。特に目立つたのは罵詈雑言を吐かれる大旦那様の声でした——それから幼い子供が泣き叫ぶ声——気性の荒そうな女性が尊大にも食つてかかる声——そして何かを打ちすえる音が聞こえ——水を打つたような静けさが続き——うめき声とむせび声次第に丘の斜面に消えて行つたというじや

ありませんか！ そのあと、大旦那様は召使いを全員集合させ、ひどくののしりながら、さらにひどい言葉でみんなにおっしゃったそうです。娘が恥知らずなことをしでかしたので、たたき出してやった——あいつとあいつの餓鬼もろともだ——手助けでもしようものなら——食べ物をやったり——かくまったりしようものなら——絶対に天国なんか行けないように神様に祈ってやるぞってね。その間ずっと、ミス・グレイスは真つ青な顔で石のようにじっとして大旦那様の横に立っておいででしたが、大旦那様の話が済むと、なすべき仕事は終わった、目的は達せられたと言わんばかりに、深いため息をつかれたとのことです。

それ以後、大旦那様はオルガンに決して触れようとなさらず、その年のうちに亡くなられてしまいました。それも当然のことですよ！ 恐ろしい狂乱の夜が明けた翌朝、羊飼いたちが丘陵地の斜面を降りて来る時に見たものは、ヒイラギの木の下に座って死んだ子供を——右肩にひどい傷跡のついた子供をなでながら、すっかり気が狂って笑っておられたミス・モードだったのですからね。「でもね、その子が死んだのは傷のためなんかじゃありませんよ」とドロシーが言いました。「凍てつく寒さのためだったんです——野獣は巢穴に、家畜も囲いの中に入ってしまふ寒さだというのに——その子と母親は家からたたき出されて、丘陵地をさまよっていたんですからね！ さあ、これで全部お話ししましたよ！ 恐ろしさも半減しましたでしょう？」

婆やは聞く前よりずっと怖くなりましたが、ええそうですねって答えました。この先ずつとロザモンド嬢と一緒に、そら恐ろしい屋敷から完全に出ることができたらって思わないでもありませんでしたが、お嬢様を残して行くつもりはありませんでしたし、そうかといって連れ去る勇気もありませんでした。それにしても、ああ！ どんなに目を光らせて、お嬢様をお守りしたことでしょうか！ 日が暮れて五分も開け放したままにしておくことなどないように、婆やたちは日没の一時間か、それ以上も前にかんぬきで扉を閉ざし、窓の戸締りをしっかりとしました。それでもまだ、お嬢様にはあの不気味な子供の悲しい泣き声が聞こえたようですわ。いかに婆やたちが手を変え品を変えて留め立てしようと、どうしてもお嬢様はあの子の所へ行き、家の中に入れて容赦ない風と雪から守ってあげたいって言われるのです。

その間ずっと、婆やはできるだけミス・ファーンニヴァルとスターク夫人から離れているようにしました。それは二人のことが怖かったからです——青白く厳しい顔つきと夢見がちな目で、身の毛がよだつような過ぎ去った時代ばかり回想しておられる二人の近くには、幸せなことなどあるはずがないと思っていたからですよ。でも、怖かったとはいえ、婆やは憐れみのようなものを感じました——少なくともミス・ファーンニヴァルに対してはね。地獄の底に落ちた人といえども、あの方の顔にいつも浮かんでいたような、あんな絶望的な表情はとてできないでしょう。最後はかわいそうにさえ思うようになりました——無理

強いされる場合を除いて全く口をきかれなくなつたからですが——それで、あの方のために祈つてさしあげたほです。ロザモンド嬢にも大罪⁽¹⁸⁾を犯した人のために祈つてあげるようにして申し上げました。ところが、ひざをつけて祈りの言葉をいざ唱えようとなさると、お嬢様は必ず聞き耳を立てられ、急に立ち上がるや、「あの子がとても悲しそうに泣き叫ぶ声が聞こえるわ——ああ！ 中に入れてあげてちょうだい。でないと、死んじやうわ！」とおっしゃつたものでした。

ある晩のこと——初春を祝つたばかりのことで、やつと長い冬も峠を越えたように婆やには思いましたが——西の茶の間の呼び鈴の音が聞こえました。三回鳴つたので婆やを呼ぶ合図でした。ロザモンド嬢は眠つておいででしたが、ひとり残して行きたくはありませんでした——大旦那様の演奏が以前よりも激しくなつていたからですが——それに、お嬢様が目を覚まされて、あの幽霊のような子供の声がまた聞こえはしまいかつて心配でしたから。姿が見えることはないと思つていました。そんなことがないように、窓はしっかりと締めていましたからね。そういうわけで、お嬢様をベッドから抱き上げ、その辺にあつた手ごろな外套に包んで、下の茶の間へ運んで行つたのです。ここでは老婦人たちが普段のように座つてタペストリーを作つておられました。婆やが入つて行きますと、二人とも顔をお上げになり、スターク夫人の方がびっくり仰天したように「暖かいベッドで寝ておられたのに、どうしてロザモンド嬢まで連れて来たの？」とおっしゃいました。「わたしが

いない間に、あの雪の中にいる凶暴な子に誘い出されては大変だと思つたからです」と婆やが小さな声で言いかけると、スターク夫人は（ミス・ファーニヴァルの方をちらつと見て）急に婆やの口を封じてから、ミス・ファーニヴァルが織り方を間違えられたので、婆やに直してもらいたがっておられると言われました。二人とも目が悪いので糸を抜いてほどこことがおできにならなかつたのです。それで、婆やは大切なお嬢様をソファーの上に寝かせ、二人のそばの腰掛けに座りはしましたが、風が出てヒューヒューうなっているのが聞こえましたので、二人の方ばかりに心を注がないようにしていました。

ロザモンド嬢は、あんなに風が強かつたのに、ぐつぐつと眠り続けておられました。ミス・ファーニヴァルは押し黙つたままで、突風で窓がガタガタと鳴つても振り向かれることはありませんでした。ところが、出し抜けにすくつと立ち上がるや、まるで婆やたちを聞いてみよと命令せんばかりに片手をお上げになつたのです。そして、「声が聞こえる！」とおっしゃいました。「恐ろしい叫び声が——お父様の声が聞こえる！」

ちようどそのとき、お嬢様がびくつとして目を覚まされました。「あの子が呼んでいるわ。ああ、なんて悲しそうなもの！」と言われ、起きてその子の所へ行こうとなさいました。が、毛布で足がもつれてしまいました。婆やは急いでお嬢様を抱き寄せましたが、それは婆やたちの耳には全く入つて来ないのに二人には聞こえるという、そういう声に戦慄を覚え始めていたからです。一、二分すると、その声が聞こえ始め、どんどん大きくなつて、

婆やたちの耳一杯になりました。婆やたちにも叫び声が聞こえるようになったのです。それは外で吹き荒れる冬の寒風が聞こえなくなるほどでしたわ。スターク夫人と婆やお互いの顔を見ましたが、怖くて口がきけませんでした。ミス・ファーニヴァルは不意に扉の方へ行かれるや、奥の控えの間に入り、西の玄関の広間を通って、大広間の扉をお開けになりました。続いてスターク夫人が行かれたので、婆やは怖くて心臓がほとんど止まりそうでしたが、後に残る勇氣もありませんでした。

それで、お嬢様を両腕でしっかり抱きかかえると、二人に続いて出て行ったのです。玄関の広間では叫び声がそれまで以上に大きく聞こえました。どうやら、東の翼棟の方から——だんだん近づいて行くと——かんぬきで閉ざした扉のすぐ反対側から——すぐ後ろ側から聞こえて来るように思えました。ちょうどそのとき、大きな青銅製のシャンデリアが爛々と輝いているのに広間自体は薄暗いという、そして大きな暖炉の火がパチパチと燃えているのに全く暖かくないということに気がつき、婆やはあまりの恐怖に体がぞくぞく震え、思わずお嬢様をしかと抱き寄せました。でもね、そうした時のことです、東の扉がガタガタと揺れたのは。お嬢様は急にもがいて婆やから逃れようとなさり、「ヘスタ！ 行かなくちゃならないの！ あの子があそこにいるのよ！ 声が聞こえるの！ やって来るわ！ ヘスタ、行かせてちょうだい！」とお叫びになりました。

婆やは力一杯お嬢様にしがみつきました。命を捨てるつもりで取りすがったのです。た

とえ死んでも、お嬢様から両手を離すことはなかったでしょう。それほど決死の覚悟だったのですよ。ミス・ファーンヴァールは立ったまま耳をそばだてておられ、お嬢様などどこ吹く風といった様子でした。お嬢様は地面に降りておいででしたので、その時ひざまずいていた婆やは、まだ泣きながら逃れようとしてもがいておられたお嬢様の首に、両腕を巻き付けて抱き締めました。

突如として東の扉が、まるで激怒のあまり無理にこじ開けられたかのように、一大轟音とともに崩れ落ちました。そして、そこに一杯あふれていた神秘的な光の中から、白髪で眼光鋭い長身の老人が姿を現わしたのです。老人は忌み嫌うかのように情け容赦もない素振りを何度も示し、美しいけれど厳格そうな女性とそのドレスにしがみついた幼子を押して来ました。

「ああ、ヘスタ！ ヘスタ！」 ロザモンド嬢が叫んでおっしゃいました。「例の女の人だわ！ ヒイラギの木の下にいた人よ。あの子も一緒にいるわ。ヘスタ！ ヘスタ！ あの子の所へ行かせてちょうだい。あの人たちがわたしを引き付けるの。体で感じるわ——感じるのよ。行かなくっちゃ！」

お嬢様は婆やから逃れようとして再びもがかれ、痙攣けいれんを起こされそうになりました。でも、婆やはますます強くお嬢様を抱き締めましたので、お嬢様を傷つけるのではないかと思つたほどです。あの恐ろしい亡霊たちの所へ行かせるくらいなら、傷つけた方がましだ

と考えたのです。母と子の亡霊はそのまま通り過ぎて、大広間の扉の方へ進んで行きました。そこでは獲物に飢えた風が狂ってヒューヒューうなっていました。ところが、そこにたどり着く前に、母の亡霊の方が振り返ったのです。その時に婆やが見たものは、老人をもともせず傲慢にも反抗する荒々しい母の姿でした。でも即座に、その母の亡霊はひるんでしまい——それから我が子を——幼い子供を——老人が振り上げて打とうとした松葉杖から助けようと、哀れにも狂ったように両腕を振り上げました。

そして、ロザモンド嬢はといえば、婆やよりも強い力に引き寄せられておられるかのよう、婆やの腕の中で身もだえなさり、（この時にはかわいそうに気が遠くなっておられたようですが）しゃくり上げておいででした。

「あの人たちはわたしにも一緒に丘陵地へ行ってもらいたいのよ——だから、わたしを引き付けるのだわ。ああ、あの子が！わたしも行きたいわ。でも、意地悪な、ひどいへस्ताつたら、わたしに組み付いて放さないのね」

けれども、振り上げられた松葉杖を見て、お嬢様が気絶なさいましたので、婆やは思わず神様に感謝しました。ちょうどこの瞬間——かまどの熱風にあおられたかのように髪をなびかせた背の高い老人が、尻込みする幼子を打とうとした瞬間——婆やの横におられた老婦人のミス・ファーンニヴァルが、「ああ、お父様！お父様！その罪のない子を赦してやってください！」と大きな声で叫ばれました。ところが、ちょうどそのとき、婆やは——

いや、婆やたちはみんな——玄関の広間に一杯あふれていた青い、ほのかな光の中から別の女の亡霊が現われ、鮮明な姿になるのを見たのです。この女の人を婆やたちは今まで見たことがありませんでした。というのも、それは情け容赦もない憎しみと勝ち誇ったような軽蔑のこもった目つきをして老人の横に立っていた、もう一人の女性の亡霊だったのですから。この人物は見目うるわしい女性で、高慢そうな額をおおうほど、柔らかな白い帽子を深くかぶり、赤い唇をゆがめていました。そして前の開いた青いサテンの化粧着をはおっていました。この人物を婆やは前に見たことがあります。それは肖像画で見た若い頃のミス・ファーニヴァルでした。恐ろしい亡霊たちは、年老いたミス・ファーニヴァルの狂おしいまでの嘆願を歯牙しがにもかけず、進み続けました——そして、振り上げられた松葉杖が幼子の右肩に当たったのです。妹の方の亡霊は石のように無表情で、全く事もなげに眺めていました。ところが、その瞬間ほのかな明かりと全く暖かくない暖炉の火がひとりだに消えてしまい、ミス・ファーニヴァルは麻痺状態に襲われて——すなわち死神に襲われて——婆やたちの足元に倒れられたのでした。

そうです！ その晩ベッドに運ばれて以来、ミス・ファーニヴァルは二度と再び起き上がることはありませんでした。顔を壁に向けて横になり、低い声で絶えずつぶやいておられました。「ああ！ ああ！ 若い時にしでかしたことは、年老いても取り消せない！ (19) 一度してしまったことは取り返しがつかないのだ！」

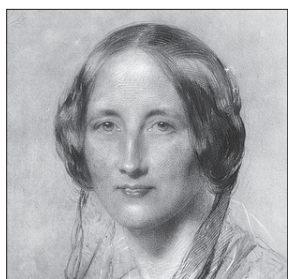
【訳注】

- (1) イングランド北西部の旧州。一九七四年に旧カンバーランド州などと一緒に統合されてカンブリア州となる。北西部には有名な湖水地方 (Lake District) がある。
- (2) イングランド北東部の州。南部にはローマ時代のハドリアヌスの長城があり、チェビオット丘陵にかけて国立公園に指定されている。
- (3) カンブリア州北部の都市で州都。十二世紀に建立された大聖堂が有名。
- (4) 旧ノーサンバランド州の南東部にあるタイン川に臨む港市。造船業の中心地で、石炭の積み出し港。
- (5) 慣習として次女以下は洗礼名を省略しない。
- (6) 十五～十六世紀に流行した、宝石や刺繍で装飾された三角形の胸飾り。後には女性胴着 (bodice) の下に着用した。
- (7) 旧約聖書の「イザヤ」四十章六節を参照。
- (8) 湖水地方のウインダムアから南南東約五マイルの所にある町。
- (9) ほとんどのキリスト教徒にとって、日曜日は仕事をしない安息日 (Sabbath)。
- (10) スコットランド南部の羊飼いや着る灰色または黒色格子縞の毛織物の肩掛け。
- (11) 真鍮製で長柄のついた蓋付きの鍋で、中に燃えている石灰や熱湯などを入れたもの。

- (12) 青い目は無垢の象徴。おとぎ話の善なる妖精とヒロインたちも青い目が多い。
- (13) 干しブドウやリンゴなどを刻んで砂糖・香料・スエツトなどを加えて混ぜた肉入りのパイ。
- (14) カーライルの南東約二六マイルにあるアップルビー・イン・ウエストモアランドのことか。スウエイト (thwaite) は森林を切り開いた牧畜用の土地のことで、地名によく使われる。
- (15) 旧約聖書の「箴言」十六章十八節を参照。
- (16) マンチェスターの東約四五マイルにあるドン川に臨む炭鉱都市。毎年九月の第二週目に伝統的な競馬が催される。
- (17) 勘当された息子は金のために兵隊や船乗りになることが多かった。
- (18) ここでは精神的な死をもたらす七大罪 (pride, covetousness, lust, anger, gluttony, envy, sloth) の中の「高慢」を指す。
- (19) 『マクベス』五幕一場六四行のマクベス夫人の言葉。

【作品と作者について】

「婆やの話」(The Old Nurse's Story) はディケンズが編集する『ハウスホルド・ワーズ』の一八五三年クリスマスマス特集号に掲載された。ギヤスケルの影響を受けたと言われるヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』(The Turn of the Screw, 1898) ほど様々な解釈を許容することはないが、ディケンズもまた「婆やの話」を激賞しているように、ヴィクトリア朝の幽霊物語の中では最高の部類に入ると言ってもよい。



ギヤスケルはユニテリアン派の牧師の娘として一八一〇年にロンドンのチェルシー地区で生まれた。一歳になる前に母が死んだので、マンチェスターの南にあるナッツフォードという田舎町に住んでいた伯母に引き取られて育てられたが、この子供時代を過ごした町は代表作『克蘭フォード』(Cranford, 1851-53) の舞台となっている。三二年に同じユニテリアン派の牧師ウィリアム・ギヤスケルと結婚し、夫の救貧活動の手伝いなどをしていたが、待望の男の赤ちゃんを猩紅熱で失った。その悲しみを紛らわすために書いた処女作『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848) は、新興産業都市マンチェスターの悲惨な生活を描いた社会小説であ

る。彼女の社会小説には、他にも堕ちた女の問題を扱った『ルース』(Ruth, 1853)、そして田舎と都市や労資の問題を描いた『北と南』(North and South, 1854-55)があるが、マンチェスターを拠点に活動したギヤスケルの社会小説は、ロンドンを舞台として書かれたディケンズの作品に負けず劣らず、第一級の歴史資料となっている。また、ナポレオン戦争時の強制徴募隊を描いた歴史小説『シルヴィアの恋人たち』(Sybil's Lovers, 1863)、伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』(The Life of Charlotte Brontë, 1857)、未完ながらも円熟した家庭小説『妻たちと娘たち』(Wives and Daughters, 1864-65)など、ギヤスケルは様々なジャンルの作品を書いていく。しかし、そのジャンルの広さは、ゴシック、恋愛、歴史、推理、犯罪、教養、幽霊、ピカレスク、パストラル、ファンタジーなど、多岐にわたって書かれた短篇小説においてより顕著である。ギヤスケルの幽霊物語を無断借用したディケンズは、彼女の非難の手紙に對する謝罪と弁明の返信の中で、彼女を『千一夜物語』の語り手にたとえて「親愛なるシエハラザード様」と呼んだが、それは編集者のいかなる要求にも対処できる彼女の能力の高さを示すとともに、彼女が手がけるジャンルの広さに対する賛辞にもなっている。

